出雲流庭園の謎を探る

林　秀樹

１，出雲流庭園について情報発信

出雲流庭園という言葉がある。最初に誰が使ったかは定かではない。
島根県技術士会の庭園文化研究部会では、県内の優れた庭園の調査研究を続け，様々な視点からレポートを書いてきた。その中では、いつも出雲流庭園とは何かと言う議論を続けているが、謎は深まるばかりである。

そんな中、2017 年に、本会のホームページから出雲流庭園のレポートを見つけ、２件の問い合わせがあった。研究部会の目的の一つである社会貢献に寄与できたのではと思い、まず、紹介する。

今に生きる不昧 ～没後200年を前に～ (20)　第4部　不昧公好み編(5)

出雲流庭園

機能美重視 茶道と密接

１－１, 山陰中央新報への取材協力

2018 年が、松平不昧公没後 200 年となることから、県内の行政機関、茶道、美術工芸などの関係団体が、記念事業を計画されている。

その一環として、山陰中央新報が、「今に生きる不昧」という特集記事で、出雲流庭園を紹介することとなった。出雲流庭園は、不昧公お抱えの庭師である沢玄丹が始祖ということから、取材を受けたものである。

１－２，奈良文化財研究所への調査協力

2017 年 6 月に奥出雲町の桜井氏庭園が、国の名勝に指定された。県内では、石見地方で雪舟庭園をはじめ多くの庭園が文化財登録されているが、出雲地方で初めての登録となった。

奥出雲町では、奈良文化財研究所の協力を得て、絲原氏庭園についても調査を続けている。この庭園は、回遊式池泉庭園で出雲流庭園の始祖である沢玄丹が考案したと言われている。

調査協力の依頼を受け、庭園部会の武田、林の両名で絲原氏庭園に出かけ、研究成

果を踏まえ説明した。桜井氏庭園に続いて、文化財登録されることを願っている。

２，出雲流庭園の謎

本当に出雲流庭園はあるのだろうか。県内の造園家には、これらの庭園は出雲流ではなく、出雲風庭園であるとの意見が多い。ここでは、もう一度、その疑問点を検証してみる。この検証では、これまでのような地道な調査だけでなく、とんでもないような仮設を立て，その謎を探ってみたいと思う。

２−１，流派とは何か

流派とは、流儀を継承し、実践する集団である。技術や技能を家本や宗家が統率し伝授継承する。茶道や日本舞踊などの様々な芸道に流派があり、集団となり活動を続けている。

それでは、庭園の作庭技術のような技術集団にも流派はあるのだろうか。

確かに伝統的な技術には、流派があるという。野面石積みの穴太衆（あのうしゅう），宮大工でいえば立川流や大隅流というところである。しかし、これらの流派は、技術者集団であって、目的とする築造物の目的やデザインは、依頼人、発注者の意向に左右されることが基本である。例えば、寺院の建築を頼まれて，その流派が得意とする神社様式で寺院を建築することは考えられない。

今年度の庭園調査では､安来市伯太町の後藤氏庭園を訪問した。後藤氏は多くの社寺の建築修理を行い、日本伝統建築技術保存協会に所属している宮大工である。そこでの説明でも、宮大工は依頼があれば社寺仏閣や数寄屋建築、何でも建てることができるよう技術を磨いていると話された。左の写真を見ていただきたい。茶室の壁に飾られた一輪挿しの花立てを指さし、指物の技術も宮大工に技術鍛錬の一つであると説明された。宗家のある茶道のような流派と違い、技能の流派は、技術を研鑽し、弟子を育てる技術者集団なのであると思っている。

２−２，庭園の流派

重森完途は、島根県でも県庁中庭やホテル宍道湖庭園など多くの庭を手がけている昭和の著名な造園家である。彼の研究論文「日本庭園における流派の研究」には、庭園の流派として、京都の嵯峨流、夢想流、桑原流、青森の武学流などとともに出雲の玄丹流を挙げている。玄丹流というのが，出雲流のことである。名の由来は、先にも述べた松平不昧公お抱えの庭師沢玄丹から名付けられたようである。

しかし、庭園の流派があるとすれば、宗家が残り、そこに出雲流庭園の作庭技術者が集まっているのではないだろうか。

先に述べた野面石積みの技術者集団である穴太衆（あのうしゅう）には、現在でも専門の建設会社があり、技術継承を行っているという。

松江市島根町見徳寺　野面石積み

仮に穴太衆のような出雲流庭園の技術者集団がいたとすれば、その活動記録が残っているのではないかと考えられる。残念ながら、出雲には多くの庭師はいるが、出雲流を名のる技術者集団は見当たらない。

出雲流の創始者である沢玄丹は、不昧公お抱えの庭師であることは先にも述べた。不昧公は、東京品川の松江藩松平家下屋敷に 11 もの茶室を点在させた大庭園を造らせたという。仮に沢玄丹が本当に不昧公のお気に入りに庭師であれば、品川の下屋敷の作庭が手一杯だったのではないか。

庭園は維持管理も重要な作業である。沢玄丹は品川大崎の庭の管理に手を取られ、出雲の寺や個人の庭を造る余裕はなかったのではないかと考える。

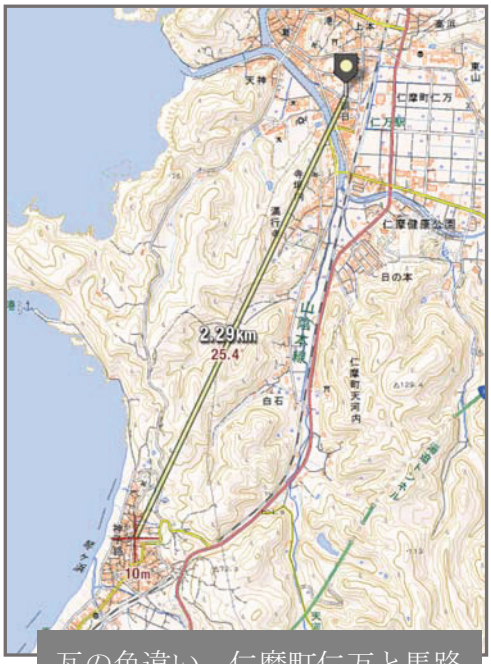
では、沢玄丹の弟子達が玄丹流を名乗り、玄丹が考案した庭のデザインを松江藩で庭造りをしたのだろうか。不昧公没後 200 年たったとはいえ、歴史的には最近である。玄丹流の作庭記録がないのは不思議である。代表的な出雲流庭園である出雲市斐川町の原鹿の旧豪農屋敷庭園は、明治末期に築庭されたというから、疑問はますます膨らむのである。

２−３，誰が庭のデザインを決めたのか

何故、出雲地方に同じデザインの庭ができたのだろうか。限られた地域ではあるが出雲流庭園はたくさん築庭されている。

出雲流庭園の技術者集団はいなかったとすれば、誰がデザインを決めたのだろうか。

石見は、石州瓦を使った赤瓦景観であるという。確かに赤瓦町並みは多い。しかし、国道 9 号を西に向かって走っていると、突然黒瓦の町並みが目に入る。大田市仁摩町仁万に入ったのだ。東隣の五十猛町、西隣の仁摩町馬路は赤瓦の町並みであるのにこの町だけは黒瓦が主流である。直線距離で 2.3 キロメートル離れただけ



瓦の色違い　仁摩町仁万と馬路

である。40年前の航空写真を見ても黒瓦と赤瓦景観の地域に変化はない。瓦職人が違うのか、近くの瓦工場の瓦の色が違うのか。すべて、ノーである。地域が見えざる手によって導かれているように思えてならない。

地域がデザインされていく過程では、情動、記憶、知覚、コミュニケーションなどの影響を受けるという。これら様々な影響を受けることを見えざる手により導かれると説明してみるとわかりやすいと思う。

出雲流庭園の作庭にも赤瓦の町並みが造られた経緯と同じように、出雲という限られた地域で、見えざる手によって，庭造りがなされたのだろうか。

２−４，出雲流庭園の分布

出雲流庭園の分布域については、武田技術士が先の報告書で詳しく整理している。

その分布域を見てみると、松江，出雲、斐川、平田などの宍道湖の周囲と奥出雲となっている。斐伊川流域であるが、宍道湖までである。中海に面した東出雲や安来，広瀬、伯太では，これまでの調査では出雲流庭園は発見できていない。

庭師の活動範囲は広い。出雲流庭園を作庭した庭師が安来や東出雲の庭を造る機会も多かったに違いない。それでも、庭のデザインを変えたのは何故だろうか。

また、出雲流庭園の築庭が始まった文化文政の時代は、出雲大社参りや伊勢参りなどが盛んになってきた時代であり、あらゆる芸能やさまざまな技術が地方に伝播していった頃である。大社参りの人たちが、出雲流庭園を見る機会も多かったと思われる。

それでも、ふるさとに帰って出雲流庭園を摸した庭を造らなかった。

本家本元の松平不昧公は、出雲流庭園を造ったのだろうか。彼が品川大崎の出雲下屋敷の大庭園を造ったことは先にも述べた。

この庭造りに出雲流の手法が使われていたのだろうか。

図 10「不昧侯大崎別業図并亭樹明細図(写)」の内「独楽庵の跡」図(国立国会図書館蔵)

残念ながら、この下屋敷は明治の初め、屋敷も庭園も取り壊され、今は跡形もなくなっている。幸いなことに絵図は残されている。上の図は、出雲の文化伝承館に移築されている茶室「独楽庵」の庭らしい。

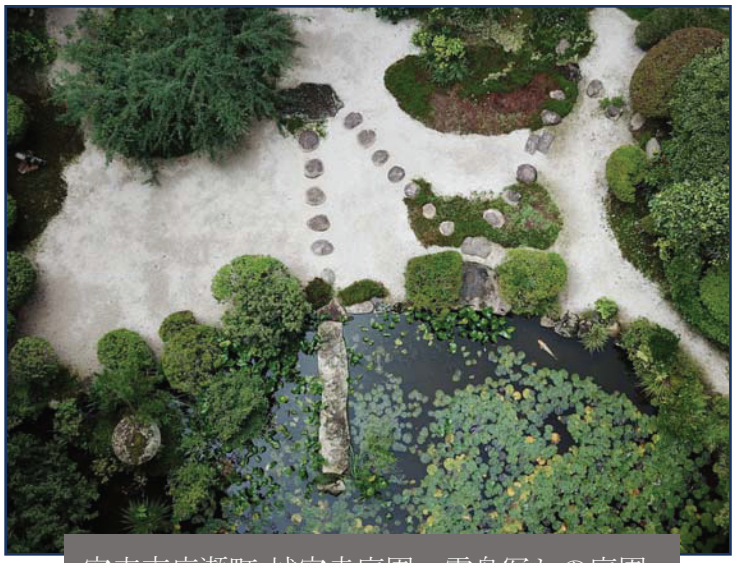
絵図には、灯籠や飛び石はあるが、出雲流庭園のデザインは確認できない。何故だろうか。この茶室は、不昧公のお気に入りだと言われているのにである。

絵図は、県立図書館にも複写がある。沢玄丹が造ったのではないかと思われるこの出雲下屋敷庭園に出雲流のデザインがあるか調べてみたい。

３，出雲流庭園の仮想現実技術

仮想現実とは、バーチャルリアリティのことである。コンピュータが作り出す仮想の空間を現実であるかのように近くさせる技術のことをいう。

この仮想空間の創造については、コンピュータが世に出る前から、日本庭園の作庭手法として行われていたと思っている。須弥山や三尊石、茶庭における蹲踞，鶴亀の役石、水が流れない枯れ滝や海辺を表す州浜など枚挙にいとまがない。コンピュータが作り出す仮想現実のような写実性はないが、抽象的で、見るものの想像幅を広げる。出雲流庭園の仮想現実として、枯山水、駕籠石、雪見石灯籠を取り上げる。



安来市広瀬町 城安寺庭園　雪舟写しの庭園
出雲流庭園のデザインは見当たらない

３−１，枯山水

出雲流庭園の基本的スタイルは、枯山水庭園である。水のない庭で滔々と流れる水をイメージさせることからこの庭は始まっている。枯山水庭園にしたのは、出雲平野は、平坦な地形であるから、庭に水を引くことが困難なのだからとの説明が多い。出雲平野は用水路が張り巡らされており、生活用水として使っているところは、年中水を流している。池の水を確保することがそんなに困難だったのか。

出雲流庭園の枯山水は、盆景の手法を庭に応用したものだと言われている。盆景とは、お盆の上に白砂や石を用いて、山、滝、河、海などを表現する伝統芸術である。出雲流庭園は、客間から巨大な盆景を見るようである。枯滝から枯流れ，広い砂浜の海までも表現する抽象的ではあるが壮大

松江歴史館 出雲流庭園 枯山水

な仮想現実を見せるものである。出雲流庭園の大きさは様々であるが、大名庭園のそれとは比較にもならないほど狭い。その中で、山深い滝からだんだん川幅が広がり、海まで流れる壮大な自然を凝縮する仮想現実を表現するためには、枯山水でなければいけなかったのではないかと考えている。目を閉じると滝から流れ落ちる水が、海に流れ込み、浜には波が打ち寄せるバーチャルな世界が広がる。

３−２，駕籠石

この石は、殿様が家を訪れたときに，庭の中央の平坦な大きな石まで駕籠で乗りつけるから名付けられたという。

出雲市斐川町 原鹿豪農屋敷庭園 駕籠

しかし、実際にそこまで駕籠に乗っていくのはほとんど意味のないものであることは見ればわかると思う。担ぎ手が不揃いな飛び石を渡り、駕籠石までたどり着くまでに籠の中の殿様は大揺れとなる。客間に入るための踏み石も蹴りが高い。雨や雪など降っていれば、大変である。客用にしつらえられた玄関から入る方がずっと快適というものである。

駕籠石は、あくまでもバーチャルに駕籠と殿様の動きを夢想するものであって、現実に利用されたものではないと思っている。実際、駕籠に乗った殿様の時代がおわった、明治に入っても庭の中心に大きな駕籠石が据えられているのを見ることからも明らかではないだろうか。

３−３，雪見石灯籠

出雲地方の特産品である来待石灯籠は、出雲流庭園には不可欠な庭園素材である。庭園には様々な灯籠が据えられるが、その圧巻は雪見石灯籠である。

絲原氏庭園 雪見石灯籠

灯籠は火をともすものだと思っている人も多いと思うが、実際に庭園の灯籠に蝋燭がつけられることはほとんどない。写真の雪見石灯籠は、絲原氏庭園のものである。高さが低く傘が大きな雪見石灯籠は、大きな傘に積もった雪を愛でるものであり、バーチャルな目で見れば、火袋に赤々と蝋燭の火が見えるのではないだろうか。

４，されど出雲流庭園

出雲地方のさらに限定された地域で次々と誕生していったこの庭園デザインをさらに別の視点から検証してみる

４−１，出雲流庭園デザインの継承

庭のデザインは、依頼した人（工事発注者）が準備できる予算、庭への思いを庭師（工事施工者）が資材の調達、技量を考えて決定される。流派はないことは、先に述べたが、仮に流派があったとしても、依頼人が庭師の提案した庭園デザインに同意しないと庭はできない。

最近作庭された出雲流庭園

それなのに何故同じデザインの庭が出雲地方にたくさん築庭されたのだろうか。不昧公没後も100年以上にわたり玄丹流・出雲流と言われる庭園が作り続けられたのであろう。

この出雲独特のデザインの庭園を持っている人たちは、自分の庭を出雲流とは思っていないのではないか。

先に述べた石州の赤瓦で屋根を葺いている人たちは、石見の赤瓦景観を形成するために屋根瓦の色を決めたわけでない。赤瓦が絶対に良いとも考えていない、周りの家並みが赤瓦なので、屋根は赤瓦と信じていると考えた方が良いのではないか。

庭は、日常の生活の場となるより，趣向の世界である。作庭にかかる費用は、本宅を造る費用ほどではないとしても,蔵や納屋を建てる費用より高額となるときもある。作庭を依頼した庭師が出雲流庭園を造りましょうと提案したから，出雲流の庭となったわけではなく、自分の好みで庭を造ったと考えている。

では、何故、同じデザインの庭を造るのだろうか。

その理由の一つは、人々が庭造りを競ったからではないかと考えている。競うためには、同じデザインの庭でなければ比較にならない。そう思い、地域の現状の庭のデザインを継承し、権勢を競い合うからこそ、同じデザインにしたのではないかとも考えている。あまり良い例ではないかもしれないが、同じ投げるスポーツでも槍投げと砲丸投げなどの異なる競技を競っても、優劣を決めることは難しい。同じスポーツで競ってこそ優劣ができる。庭園も同じと考えている。

江戸も末期になると、この地域も豊かになり、家を新築したり改築したりする人々

も増えてきた。その時に出雲地方では庭の競争が始まり、同じデザインの庭を造っていたのかもしれないと考えると分かりやすい。

４−２，民俗信仰と出雲流庭園

出雲平野の出雲屋敷は、築地松に囲まれている。北と西からの風を防いでいるというのが通説であるが、丁寧に見てみると，北に山を背負っている屋敷でも北にも築地松が植えられている。何故だろうか。これは、単に自然から家を守るのではなく，鬼門の考えと同じように悪霊を防ぐバリアーの役割を果たしていたのではないだろうか。

悪霊封じのため、家の隅で荒神を発見することも多い。

勝手な想像かもしれないが、この地方の民俗的信仰が影響し、悪霊の侵入を防ぐ風水信仰や荒神信仰により，築地松や庭がデザインされたと考えてみると面白い。

本来の庭の定義は、囲まれた広い場所を示す言葉である。学びの庭とは、学校のことであり、庭園をいうのではない。裁きの庭と言う言葉もある。庭は、バリアーで囲まれている。

出雲流庭園のバリアーとは何かについて、短冊石と山灯籠から考えてみる。

出雲文化伝承館 出雲流庭園

４−３，短冊石

長尺の短冊石が出雲流庭園の大きな特徴であることは、言うまでもない。

短冊石は、客間と枯山水の庭を切るように据えられている。枯山水のデザインとも関連がなく異質で、長尺石の前後に据えられた飛び石との連続性も無視して据えられているのである。長尺石は、庭も眺める客間と枯山水の庭を線で区切っているのではないか。庭と住宅の境界を明確にする大切な仕掛けではないかと考えている。

４−４，山灯籠

出雲流庭園の大きな特徴である。石灯籠は、御影石のものも多く、来待石の生産地だからという理由はあたらない。調査をすると、確かに出雲流庭園には、一般的な日本庭園と比べて見てみても、たくさんの灯籠が据えられている。客間から見える春

熊野大社 境内地の外の山灯籠

日型など様々なデザインの灯籠は整形式であるが、庭の端には、自然石で造られた山灯籠がひっそりと据えられている。

火は邪気を払い、悪霊の侵入を防ぐ。石灯籠は、火をともしていなくても火をともしているのと同じであるといわれている。邪気を防ぐため、社寺仏閣の灯籠には、わざわざ「獻燈」と書かれていることも同じである。

それでは、社寺仏閣には山灯籠はあるのだろうか。前のページを見てほしい。熊野大社の境内は整形式の灯籠であるが、境内地の境界付近にひっそりと山灯籠は立っている。

山灯籠は、囲まれた境内地と野（自然）との境を示すものであり、境界を守るバリアーではないだろうか。

５，行動経済学からのアプローチ

2017年のノーベル経済学賞に選ばれたリチャード・セイラー氏は、行動経済学の分野では三人目の受賞者である。

心理経済学とも言われるこの学問は、これまでの経済学とは異なる視点から経済を分析してるらしい。人と群れをなそうとする心理のハーティング効果や大きな変化や未知なるものを避ける現状維持バイアスなどの考え方が示されている。

まだ、勉強をはじめたばかりであるが、この考えを応用すれば、開発や施設整備に向けての新たなニーズ調査ができると考えている。

出雲の人々は、鉄山師から豪農や豪商だけでなく、庶民に至るまで、大小の出雲流庭園を造ってきた。高額な庭石や灯籠を使い多額の経費をかけてきた。

快適な暮らしを目指した庭であれば、見栄っ張りな庭は造らない。莫大な費用をかけて似たような庭をたくさん造ってきた出雲の人々の経済価値観を推理するためには、行動経済学からのアプローチも面白いと思っている。

６、出雲流庭園の分布と一畑薬師灯籠

出雲地方の街道沿いには、一畑薬師灯籠が点在する。これまで調べたところでも、100カ所以上を数える。この一畑灯籠と出雲流庭園の分布域はほとんど同じであることに気がついた。

一畑薬師灯籠・石碑分布

一畑薬師灯籠と出雲流庭園は出雲市や松江市から奥出雲町まで点在しているが、東出雲、安来、広瀬、伯太の各地域では、どちらについてもその存在を確認していない。東出雲から東の庭園は、庭のデザインが異なるのである。一畑薬師灯籠も松江市大庭町が東限である。

東出雲から伯太までも旧松江藩であり、産業についても、たたら製鉄や農業、湖水での漁業など共通点も多い。地理や歴史に大きな隔たりがあるとか、地貌が大きく異なることはない。この分布の違いは大きな謎である。

街道の一畑薬師山灯籠

島根の貴重な地域遺産の一つであることから庭園の研究を始めたが、単なる文化遺産としての庭園だけでなく、地域の作り方についても新たなことがわかってくるのではないかとの期待も大きくなってきた。これからも、民俗宗教学や行動経済学の力も借りて、様々な視点から島根の庭園研究を深めていきたいと思っている。